

20 『病名彙解』 所載の鍼灸

杉浦 雄

日本鍼灸研究会

『病名彙解』は、江戸中期の初め、貞享三年（一六八六）に蘆川桂洲によって著された病名病證辞典である。本書は序目一卷、本文七巻から構成され、一八四六の病名につき、一七四五項目の見出しを立ててイロハ順に配置し、諸書を引用しながら漢字仮名交じり文で解説している。本書は、病名病證辞典としては日中を通じて最も古いものの一つであるが、その解説文には江戸中初期頭の医学の典拠書とその扱いの軽重がよく現れ、当時の医学状況を考えるうえで貴重なものとなっている。

筆者は以前、本書で病名を解説する際に用いられる引用書を調査し、その報告を行ったことがある（日本鍼灸史学会第十三回学術大会一般講演『病名彙解』の引用書について）。それによると、本書では、のべ一

八〇〇回程の引用が見られるが、そのうちの約九割は医書であり、医書以外の文献は一割にも満たない。使用される医書は約一〇〇書目で、最も多く引用されるのは『諸病源候論』であった。また約七割が明代の医書で、『医学入門』、『證治準繩』、『外科正宗』などが多く引用される。一方、医書以外の文献は『字書』、『字彙』、『説文』などで、病名の解説のほかに、訓詁や音韻などにも用いられる。以上の結果を踏まえ、今回は更に本書解説文中に現れた鍼灸について考察した。

本書に引用される医書約一〇〇書目のうち、鍼灸書は『鍼灸聚英』、『類経図翼』の二書に限られ、引用はともに五回、所出する病名・病證は、『鍼灸聚英』は「偷針眼」、「外障」、「拳毛」、「喉痺」、「赤睛」、「類経図翼」は「口中転屎」、「亀胸」、「頰填」、「侵囊」、「錐銳癰」である。後でも述べるように、この中で鍼灸治療を取り上げているのは「偷針眼」だけであり、他は病名・病證の解説のための援用である。

次に、本書全般における鍼灸への言及について調査するため、鍼灸に関連する語を検索した。その結果、

「鍼」三七回、「灸」二四回、「刺」一四回、「艾」四回、「壯」四回の計八三語が検出された。これらの語のうち、「壯」は灸法のドーゼの具体的な指示であるが、鍼に関しては刺入深度などの記載は見られなかった。このほか「禁鍼」「禁灸」などの鍼灸禁忌に関する情報も見られた。病名・病證の面から見ると、これら鍼灸に関する語が含まれる見出しは四八項目、病名・病證は四九種類であった。そのうち、「鍼」や「灸」の指示、「刺」や「壯」などの鍼灸を連想させる語を指標とすると、治療の記載が見られるのは、「偷針眼」、「眼丹」、「滑翳」、「横翳」、「浮翳」、「黒水凝翳」、「棗花翳」、「散翳」、「驚振翳」、「洪翳」、「凹翳」、「偃月翳」、「氷翳」、「報痘」、「疥瘡」、「乾疽」、「鼠瘤」、「羊鬚瘡」、「無辜疔」、「風犬傷」、「穀道無孔」、「疔瘡」、「坐舌蓮花風」、「爪中龍伏」、「龜背」、「疣瘡」、「沙蝨」、「石蛭蝨」、「垂癰」、「陳乾疽」、「重脛」、「調疽」の三三項目、それ以外の、鍼灸禁忌や診察の記載のみが見られるのは、「龍泉疽附 虎鬚毒」、「骨風」、「重台癰」、「朮」、「鬚疽」、「発洪」、「烏癩」、「脳発疽」、「火痂」、「不痛瘡」、「浮瀕

疔」、「噫気」、「灸瘡」、「灸瘡飛蝶」、「雄丁瘡」、「石疔」の一六項目であった。また治療の記載三二項目のうち、孔穴を用いた治療の記載が見られるのは、「棗花翳」の変動した経絡の「腧穴」への施術と、「龜背」の「肺俞」と「膈俞」への施術のみであり、後の三〇項目は病変部位に対する局所治療であった。特に際だつていのが、上記の「偷針眼」も「氷翳」までの「目」に対する治療で、引用書は前述の『鍼灸聚英』、及び『外科正宗』、『医学綱目』である。このうち『医学綱目』の引用計一回は、全て卷十三・目疾門・内障からの引用である。